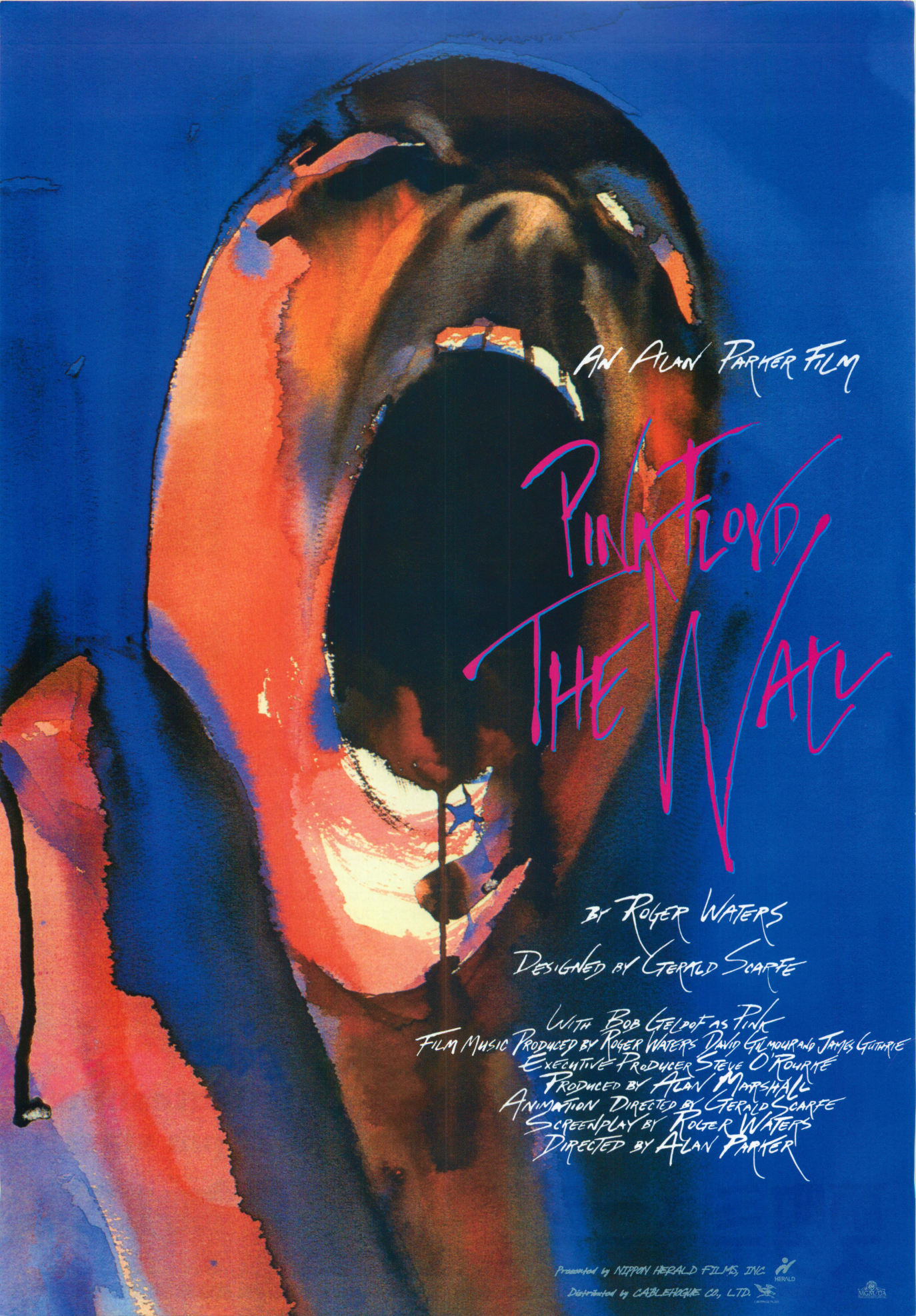
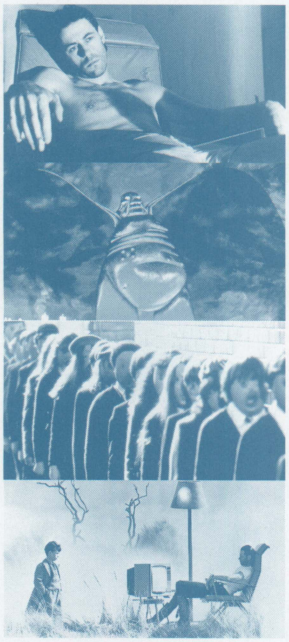

An Alan Parker Film
Pink Floyd
The Wall
By Roger Waters
Designed by Gerald Scarfe
With Bob Geldof as Pink
Film Music Produced by Roger Waters David Gilmour and James Guthrie
Executive Producer Steve O'Rourke
Produced by Alan Marshall
Animation Directed by Gerald Scarfe
Screenplay by Roger Waters
Directed by Alan Parker
Presented by NIPPON HERALD FILMS, INC.
HERALD
Distributed by CABLEHAGUE CO., LTD.
MGM/UA

ピンク・フロイドの超ベスト・セラー・アルバム「ザ・ウォール」の世界を
イギリスの鬼才アラン・パーカー(『ザ・コミットメンツ』『エビータ』)が、見事に映画化！

『ピンク・フロイド／ザ・ウォール』は世紀を超えて圧倒的な映像と音楽のパワーで20年ぶりによみがえる――。

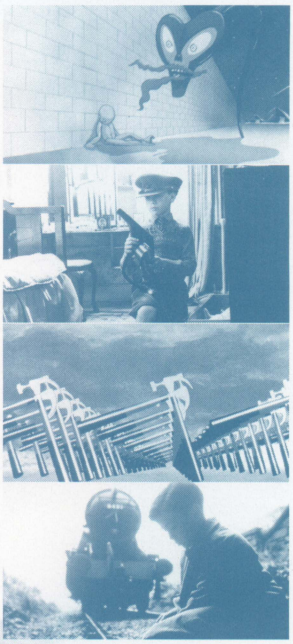
ピンク・フロイドの1980年のロサンゼルスからスタートした「ザ・ウォール」コンサートは、奔放なイメージ溢れる音楽と映像の世界を繰り広げ、オーディエンスは熱狂した。その後、ニューヨーク、ロンドン他29回の公演が行われ、50万人の観衆を動員。そして、2枚組アルバムの「ザ・ウォール」は、いまや全世界で2000万枚を越える驚異的な売り上げを記録している。

映画の脚本は、当時のピンク・フロイドのリーダー、ロジャー・ウォーターズが担当。「作品の芯は何と言ってもロジャーの心の叫びであり、彼の狂気だ。」とアラン・パーカーは語る。そしてもちろん音楽はピンク・フロイド自身による全27曲が全編、圧倒的存在感で迫ってくる。主演はバンド・エイドで知られるボブ・ゲルドフが狂気の世界を見事に熱演。さらに、本作の約1／3は「ザ・ウォール」コンサートでも登場したシュールでユニークなジェラルド・スカーフのオリジナル・アニメーションである。



この映画は時間と空間、現実と超現実の境界線が見えぬまま、
主人公ピンクの様々な苦い記憶が迫ってくる。
孤独と妄想と悪夢の世界を彷徨うピンク。やがて、彼は彼の“壁”と共にどこへ？

監督：アラン・パーカー　製作：アラン・マーシャル　脚本：ロジャー・ウォーターズ　撮影：ピーター・ビジウ
アニメーション：ジェラルド・スカーフ　音楽：ピンク・フロイド
出演：ボブ・ゲルドフ、ボブ・ホスキンス、ジョアンヌ・ウォーリー、ジェニー・ライト
提供：日本ヘラルド映画　配給：ケイブルホーグ　http://www.cablehogue.co.jp/



PINK FLOYD THE WALL

ピンク・フロイド／ザ・ウォール

1982年／イギリス映画／95分／カラー／スコープサイズ

『ピンク・フロイド／ザ・ウォール』の大いなる帰還

立川直樹(プロデューサー)

ピンク・フロイドの35年間の活動を“見事だ！”と何度も口にしてしまうくらいの音の旅にまとめ上げた2枚組ベスト・アルバム「エコーズ～啓示」が世界的なベストセラーになっている。昔からの信者も、また新たにピンク・フロイドのかけがえのない魅力の虜になった人も含めて、50年の歴史を持つロックの歴史の上に巨大な城を築き上げたピンク・フロイドの凄さに何千万人という人が溜息をついているが、そんな情況の中で映画『ピンク・フロイド／ザ・ウォール』が劇場公開されることを僕は大歓迎したい。

というのは、デヴィッド・ギルモアが「コンサートのアニメーション映画を作るのに50万ポンドも使ったから、映画を作ろうということになった」とコメントしている『ピンク・フロイド／ザ・ウォール』は一般の興行ルートにのせるには余りにも実験的かつ革新的だったために最初の公開当時は興行的には成功せず、そのまま封印されてしまって時が経過していたからである。その間にはTV放映もされ、DVD化もされたが、やはり『ピンク・フロイド／ザ・ウォール』の凄さは映画館の大画面と大音響で実感して欲しいと思うし、カルト度の高さも理屈抜きで理解できるだろう。

ボブ・ゲルドフ演じるロック・スターがホテルの部屋で人生を回顧するうちに精神に異常をきたしていく過程の分析と、それを表現する現実離れした映像。ロジャー・ウォーターズと同じ歳である監督のアラン・パーカーは、制作にあたって「何故、脚本がいる。音楽に語らせろ！」と断言し、たった35ページの撮影ノートしか作らなかったというが、「ロジャーは脚本家ではないが、彼の人生に基づいた話だし、彼の音楽に物語を語るエネルギーがある。そもそも彼の曲がこの作品を撮ろうと思わせた原動力だ」というコメントがまたこの映画の特異性というか、かけがえのなさを裏付けてもいる。

だから、約20年という歳月が経過していても、全く古臭さを感じさせないのだろう。ちょうど映画のリバイバル公開に合わせた感じで待望の来日公演をしてくれるロジャーが「物語上、重要な曲。随分前に書いていたが、アルバムやショーでは何故か使う機会がなかった、父の死を歌った自伝的要素の強い曲」とコメントする「ホエン・ザ・タイガース・ブローク・フリー」が流れる予感的なオープニングから、今や全世界で2千万枚を超える売り上げになっている2枚組アルバム「ザ・ウォール」のオープニングを飾っていた「イン・ザ・フレッシュ」が流れた途端に始まる音楽と映像、さまざまなサウンド・エフェクトの洪水は完全に観る者を迷宮の世界に引きずりこんでしまう。

実写部分とアニメーション部分がつぎ目なく自然につながっているのも、1982年という時代背景を考えれば凄いことだし、ひとつづつの曲のフレーズやリズム・チェンジに合わせて映像が猛烈なスピードで変化していく時に幾度か驚嘆の声ももれる。戦場の映像とシンクロする「ザ・シン・アイス」の歌詞の一節を借りれば、本当に“意識の奥深く滑り落ちる”ことがどういうものかを体験もできる。そしてエンドマークがでた時に“見事だ！”と溜息をつかされる。

8/3(sat)--23(fri) lateshow!
(8:25pm start!)

扇町ミュージアム
スクエアコロキューム

ホワイティ梅田泉の広場M－10階段右上がる東へ5分　TEL:06-6361-0088　www.oms.gr.jp